



Atsushi Mearu

銘苺 淳の

HAPPY HANDBALL

vol.6

PROFILE

1985年4月3日生まれ、26才。沖縄県浦添市出身。港川中で野球から転向してハンドボールをスタート。那覇西高一筑波大を経てトヨタ車体に進み、時代を変えるセンターとしての期待を集めて躍動中。ひたむきな取り組み、明るく快活な性格で、ワールドクラスのコミュニケーション能力を誇る『ハンドボール界の松岡修造』。連日更新しているブログ「おにあくま」(<http://meka-atsu.jugem.jp/>)も好評だ。

おごらず、にくまず、あせらず、くさらず、まけるな!!

『新しいステージで』

新年度も始まり、進級進学で新しいステージで、新たな立場としてハンドボールをしていると思います。環境が変わったり、責任が出てきたり、大変なこともあると思いますが、それも全部ハンドボールからのプレゼントですから、もらえるものはもらっておいた方がいいですよ(笑)。ですが、新たにになにかを始めるというのはものすごくエネルギーが必要で、こう見えて人見知りな私は、気をつかうし、慣れないし、わからないしで新しいステージに進むたびに苦労しました。

横断幕にまつわる…

新しい環境でハンドボールを始めるとそのチームの性格、チームカラーというのが見えてきます。そして試合の時に会場に掲げるチームの横断幕というのはチームを表していたり、応援している人の願いだったりするのではないのでしょうか？ どの学校も個性的で、熱い想いが詰まっています。

私の母校、那覇西高校にも横断幕があり、そこには「蜂になれ!!」というものがあつたんです。インパクトはありますよね。でも、初めて見た時はまったく意味がわからなかつたんです。高校生ですからそんな気にもとめずいつもの毎日の毎日。そんなある日、ミーティング



で恩師の新垣健先生が「君たちは蜂になりなさい」と言うんです。みんな口を開けて「意味よ…」って感じてた。しかし、これまた深い話なんです。

蜂になれの真意

想像してみてください。練習が終わりミーティングで先生の話聞いていて、1匹の蜂が飛んできました。直立不動で動けない選手。でも、ぶ〜んと蜂が迫ってくる。選手はあっち行けと思いつつ手で払ってみたり、「うう」って顔して避けてみたりしますが、蜂はしつこく選手の周辺を飛び回ります。我慢できなくなった選手は一步下がったり、しゃがみこんだりしながら避けますが、しまいには他の選手も怖くなりいっせいに逃げ出してしまいました。

これは作り話ですが、そこに健先生のめざすハンドボールがあるんです。

私たち人間の方が圧倒的に力があるにもかかわらず、たった数cmの蜂1匹を嫌うんです。もしその蜂が大群で向かってきたらどうでしょう？ いくら人間とはいえ、うしろを向いて逃げてしまうのではないのでしょうか？ そこがまさにハンドボール。沖縄県は平均身長が全国47位です。沖縄県が全国の大きな選手を相手に試合をする時、小さいけれど蜂のように動いて走ってアタックして、大きい選手に、「しつこいな、速いしもう嫌だな、かましいな」と思わせることが大事です。まさに機動的なDFから素早い速攻を何度も繰り出す。それをチーム全員が行なったらどうでしょう？ 大きい選手や大型チームでも降参してしまうの

ではないのでしょうか？

余談ですが、ミツバチの針は神経とつながっていて針を抜くと神経も抜けてしまうので、刺すという行為は自殺行為にもなります。しかし、ミツバチは1匹が刺すとフェロモンが出て集団で襲ってきます。1匹の体を張った行為が全員の攻撃性を高めるんですね。以前の記事にもリンクしますが、身体を張った1つのルーズボール獲得が全員の闘志に火をつけることがあります。

健先生は、まさに蜂のように1匹が小さくても、しつこく、粘り強く、全員で向かっていけば大きな選手に負けずに全国でも勝てるということを伝えたいのだと思います。北國銀行ハニービーの荷川取監督は健先生の教え子なので、「健イズム」がしっかりと受け継がれて強いチームになっていますね(笑)。

もちろんそこにはプロポリスやローヤルゼリーではないけど、それに見合うだけのエネルギーが必要で、高校時代はこれでもかと思うくらい本当によく走りました。当時は嫌になるくらいでしたが、基礎体力をしっかりとつけてくれたので、「今」となるとは感謝しています☆

Be a bee

みなさんの学校の横断幕にはなんと書かれていますか？ また、それに誇りを持てますか？ 大学になると校章のみのところがあります。学校の名誉のためだけにハンドボールをしているわけではないですが、自分自身のプライドとして校章が入ったユニホームを誇れる選手でありたいですね。それは最終的にはナショナルアイデンティティを高めることにつながって、自分を、仲間を、母校を、日本を誇れることにつながると思います。

中高生は最後の夏に向けた予選の時期です。全国各地で大きな選手、強い相手にもひるまずに全員で立ち向かうハンドボーラーの顔を期待しています。

震災から2ヵ月以上経ちますが、被災地の人だけではなく、いまある新しい環境は自分が考えていたものと違いはあるかもしれませんが、しかし私たちの目の前にあるのは「ハンドボール」です。120cmの小学生から2mを超えるロシア人まで同じ「ハンドボール」です。「ハンドボール」はどこにいても「ハンドボール」なので、環境がどうであろうとハンドボールをリスペクトして、仲間をリスペクトして、そして感謝して取り組んでいきたいですね。

私も大好きな恩師の言葉を胸に、震災にも負けずに小さいけれども蜂のように動き回っていきたくて、蜂蜜のような優しく甘い感動を届けられる選手をめざしていきたいと改めて思いました。